

第19号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十五年八月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西玄一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

日記	小野村新	1
一年生になつて	ゆきんこ	9
大観橋	胃弱亭骨人	15
妄想女子	明花	19
詩	三編 大西隆史	24
江戸の敵は長崎で討つ	高阪博一	29
怪談図書館	大西亥一郎	44
シヨートシヨート		
運転免許	高阪博一	54
なにしてる	大西亥一郎	56
編集室から		60

日記

小野村 新

この四月から少し暇ができたので、それとなしに過去の日記を読み返すことがある。三十年も四十年も前の日記になると、登場する人物の顔が思い浮かばないようなこともあり、人間の記憶の不確かさについて考えさせられたりもする。青春時代に特有な、センチメンタリズムを漂わせた甘い文章に辟易させられることもある反面、こんなこともあったのか！という快い驚きの気持ちに満たされることもま

まある。

先日、K中学校に勤めていた二十六歳の新米教師だった頃の日記を読んでいた、懐かしい記述に行き合った。今でこそ「懐かしい」などと書けるのであるが、当時は教師としての悩み多き日々を必死で生きていた。

一九七六年（昭和五十一年）一月二
十一日（水曜）

我がクラスの女子七名と放課後の教室で二時間ほど話し合った。むろん、私の

苦手な二名もちゃんという。教室の黒板にはすでにいろんな要求が書かれている。

1、差別について。(私たちはばかり怒って、

他の女の子には怒らない。)

2、友達関係について。

3、自分のあやまりをすなおにあやま

らない。

4、学級のことを自分で決めてしまう。

5、女子が着替える時のことについて。

6、S・H・Rの連絡について。

7、身体障害者のハガキについて。

8、ノートの落書きについて。

9、Yさんの件について

10、キャンプであつた出来事

11、男女差別(男らしさ、女らしさは

おかしい。)

12、先生にはあまり冗談が通じない。

13、国語の先生でありながら、心理が

わかってくれない。

14、班内では席換えは？

15、風紀面について。

とにかく女はやりにくい。とにかく女は理くつ屋だ！私はウーマンリブつて、大キ

ライ。

女性蔑視の表現もあり、筆写することはためらわれたが、あえてそのまま記した。

十五項目の中で、9の「Yさんの件について」の記憶だけが、比較的はつきりと残っている。教室掃除の時に、Yが私の注意を素直に受け入れなかつたので口論となり、腹立ち紛れにYの肩を右手で突いてしまったという経緯の出来事であった。確かYの箒の使い方が乱暴なことを注意し

たのだつたと思うが……？ Yと並んで床をはいていた場面は今でも鮮明によみがえる。口論となつた時の彼女の表情も――。若くて未熟な時代だつたから、生徒と対等に張り合い、指導者としての冷静さを欠いてしまつていた。反省すべき苦しい思い出である。他の要求項目に関して、ほとんどを忘れてしまつてゐる。5、6、7、8、10、15に関して、具体的にどのような要求だつたか思い出そうと努力してみたが、果たせなかつた。記憶力の衰退を嘆くばかりである。

13 に関しては、今でも妻から冗談半分で指摘されることがある。「国語の教師やのに、ほんまに人の心理がわからへんのやな」。それでほんまに国語教えてるの？生徒がかわいそうやわ」。私の担任していたクラスの生徒も同じことを言いたかったのであろう。他人の心理がわからないようでは小説など教えられるわけがないから国語の教師失格だ、ということか。これは、きつい。

話し合いは二時間に及んだと書いている。おそらく、1 から 15 の項目まで順番に

回答していったのであろう。けっこう頑固だった私は、応酬したこともあつただろうが、彼女たちの要求に対して、大半は改善すると約束したのではなかつたか。日記を読み返してみても、この件に関しては以後全くふれていないので、判然としないのであるが。

当時のアルバム写真を引つ張り出されて、七人の生徒を確認してみた。一年七組、男子二十三名、女子十八名。計四十一名。懐かしい顔が並んでいる。この中には、今でも年賀状のやりとりをしている

生徒がいる。M君である。彼は中学生時代、陸上競技部に所属しており、現在も市民ランナーとして活躍している。T君の姿もある。彼は一時期、私が勤務している高校の同僚であった。彼が校務員として赴任してきた時、世間の狭さを実感させられたものであった。はたして、あの時の七人は？　ひとりひとり確認していったが、はつきりと分かったのはわずかに二名のみであった。他の五名に関しては、曖昧模糊としたままだ。

結局、私はこの年の四月に転勤し、彼

女たちとのつきあいは一年で終わってしまった。十五項目のことを、今でも彼女たちは覚えているであろうか。

このようにして過去の日記を読み返していると、我が人生は平々凡々とした日ばかりでもなかったのだという思いにとらえられる。先ほど紹介したケースなどは、まさに「事件」といつていい種類のものであろう。長い人生を生きた人の日記の中には、「事件」と名付けてもいいような過去の出来事が数多く記されているは

ずだ。老人になつてそれを読み返して、平凡な日常生活の中にある波瀾について、懐かしい思いで振り返ることになるのであろう。

そのようなことを考える時にはいつも、取り返しのできない失敗をしてしまった過去がよみがえり、後悔の念に苛まれることになる。私には、大学四年の秋に、大切に保存していた十冊の日記帳を破り捨ててしまった苦い体験がある。庭の焚き火で日記帳を焼却し、燃えつきて灰と化した黒い残骸を見て感慨にひたつた、と書け

ばロマンチックなのだが、そんな方法など採れるはずもなかった下宿生活の私は、日記帳の一ページ、一ページをはがしてそれを細かく破り、ゴミ箱に捨てていった。

小さな紙片で埋められていくゴミ箱。今、俺はいったい何をやっているのか？ 本当に後悔しないのか？ 未練を伴つた自問を繰り返しながら、私は人間シュレッターになりきっていた。その作業は夕方から始まつて翌日の早朝まで続いた。晩秋の夜明け方の冷気がただよう殺風景な下宿部屋で、精神的にも肉体的にも疲れ切つ

た私は、ゴミ箱からあふれかえった紙切れをただ呆然とみつめていたものであった。

なぜ日記帳を破り捨ててしまったのか、と問われれば、ローリングストーンズの悪魔的な魅力によつてマインドコントロールされたため、と答えるしかない。「ビートルズがすべて」だった私の内面が、ストーンズによつて、大きく侵食されてしまったのである。ストーンズを聴き始めてからというもの、ビートルズのマイホーム主義的で甘つたるいサウンドに我慢ができなくなつ

ていった私は、ストーンズの、平板ではあるがぐいぐいと迫ってくる力強く挑戦的なサウンドに、「棄てて生きる」ことの意義をつかみ取つたのであった。ストーンズの尊い音楽が、「寂しい」「悲しい」「解つてほしい」、そんな感傷的な言葉で塗り込められた、くだらない十冊の冊子なんか棄てて、新しい人生を生きよ！と命じた。そのとおりだ、女々しい過去の自分と訣別して、真に新しい人生を生きよう！私は子どもっぽいヒロイズムに酔いしれて、結局は日記帳を破り棄てるという大きな過

ちを犯すことになってしまったのであった。

中学生や高校生や大学生の時に、自分が何を考えどう行動していたのか、どのようなレベルの文章を書いていたのか、今となつては知る由もない。趣味として小説やエッセイを書いている現在の私にとつて、貴重な資料ともなつたであろうそれらの日記の中から、良いモチーフも見出せたであろうのに。そう考えると、なおさら残念である。

現在も日記はつけている。三年連用、五年連用、はたまた十年連用といった、記

述量が数行と短く、日記というよりは備忘録に近い形のものである。大学四年生の時に日記を破り捨ててから三年を経過して、再び日記をつけ始めて現在に及んでいる自分は、何かを記録に残しておかねば気がすまないといった性格の持ち主のようである。



一年生になつて

ゆきんこ

「リーくん、おめでとう」

ぴかぴかのランドセルを背負つた、りおんの目線でこう言った。

少し照れくさそうにしながらも、嬉しそうだった。

一年生になつてから見た目も、言うこともすることも、お兄ちゃんになつた気がする。この前も、私が風邪をひいてるのを知つて遊びに来た時、持ってきたガムを手渡ししながら、「風邪ひいてるんやろ、これあげる。このラジオ聞いてみい。バーバの好きな演歌がかかつてるよ。ご飯食べたらゆつくりしときね」その優しさが身

に染みた。

この頃はお手伝いもたまにするようだ。娘が駐車場で待っていてお買いものを頼むと、売り場を店員さんに聞いて買ってくる。自信をつけたようなので、一緒にお買いものに行つて5品頼んだ。いきなり多かつたかなと思つたが、言わせると全部言える。私なら4品くらいでつまつてしまふようなのに。

りおんは頼んだ物をさつさと買つて別のレジに並んでいる。得意そうな顔だ。順番が来ると、「袋ください」と言う声が聞こえてくる。微笑ましくて笑つてしまつた。

「全部買ったよ」袋の中を見せてくれる。

「ありがとう、これでご飯作れるわー」

その日の夕食作りはいつもより力が入つた。

保育園までは親に守られての生活だったのが、小学校の登校は班での集団登校。授業が終わると、5時まで学童での生活。帰りはお友達と帰ってくる。初日は、娘も気がかりで家の角まで出て待っていると、駆け寄って来るどころか、叱られたそう。だ。「家で待つといいて！なんでも出てくるん！」もう一人前だと思つてゐるのに、して欲しくなかつたのさう。次の日からは言いつけどおり家で待つてゐると、一緒に帰つてくるお友達を紹介してくれたとか。大きくなつたと思つてゐる。

娘が馴染めるさうかとか心配してゐた学童も、初日から楽しくて安心させてくれた。聞けば、おもちゃもたくさんあるし、好きな漫画もあるからさうだ。

先生方も子供の気持ちになつて下さるし、一緒に遊んでもらえるのも大きいと思つてゐる。

6月になつて初めての授業参観があつた。朝もルンルン気分登校し、いっぱい手をあげるとの約束どおり、何回も元気に手をあげ発表した。しかし声は小さ

い。発表した後は必ず後ろを自慢げに振り向くのだそうだ。

入学してから保育園時代より、よりおもしろく元気で、少しやんちゃになり、心が開放されている気がする話を娘にすると、保育園の時は、お友達の中に自分以外の子とは遊んではいけないと束縛する子がいて、抑えざるを得なかったらしい。小学校では違うクラスになり縛られることが無くなったようだ。子供ながらに窮屈な思いをしていた。それはいいのだが、自由になるとけがが増えた。それまでは慎重であまりけがをしなかつたのに、よく転ぶのかひざは擦り傷が絶えないう。この前は、ジャンゲルジムで思い切り目の上を打ち、青あざをつくって帰ってきた。しかしこれは子供の勲章。入学した途端性格まで変わったところがみられる。それだけ、大きな節目なのだろう。

とにもかくにも、順調な滑り出しで安心している。

娘の子育てを側で見ていると、自分の時を振り返ることがある。

我が子を育てる時は、お友達と学校から帰ってくることも、約束して遊びに行くことも当たり前のことだった。もつと娘のように話をいっぱいしたり、聞いてやればよかったと悔やまれる。何かと言えば早く、早くと追い立ててしまっていた。長女は体が弱く心配がつきないし、次女はやんちゃでやんちゃで振り回され気持ちにゆとりがなかった。その上、どちらの親も遠くにいて頼ることもままならなかった。

ある時、娘が男の子は親の愛情で育つと言ったことがある。甘やかすのではなく、甘えさせることが大事と重ねて言った。

日頃、「リーくんは、可愛いね。可愛いね」をよく口にする。男の子は幼い面があるので、可愛くてならないらしい。もちろん叱る時は思い切り叱っていると思

う。それでも「ママが一番好き」という。

親に愛されず虐待される子がいる世の中で、周りからも親からも愛情をかけてもらえないりおんは幸せだと思う。その愛情を受けてこのまま、優しく思いやりのある子でいて欲しいと願う。



大観橋

胃弱亭 骨人

河口に架かる大きな橋を吹き抜ける
浜風に誘われて、私は重いリュックを背負
った一年生を追いかけるように校門をく
ぐった。

私はこの春から大観橋のたもとにある
明石市立衣川中学校の非常勤講師とし
て勤務している。数年前から縁あつて、毎
年一年契約で初任研の代替教員として、
月に一、二回程度で京都から明石の中学
校まで遠距離通勤をしてきた。最初のう
ちは、定年後の怠惰な生活に刺激を与え

てくれるこの小旅行を楽しんでいたが、最
近は年のせいもあつてか、早朝出勤に多少
苦痛を感じだして、今年はどうしようか
と迷っていたところへ、「今年は衣川中学
校でお願いできませんか。」という市教委
からの電話。私はそのキヌガワという響き
に思わず、「はい、是非お願いします」と答
えてしまった。

思えば、三十七年間に渡る教師人生
のスタートを切ったのがこの「衣川中学
校」であつた。若い頃のとときめきや感動、ほ
ろ苦い思いでの詰まつた「衣中」での教師
生活は正に私の青春そのものであつた。

「元氣な生徒が多いから、若さで頑張

つてほしい」との、市教委の励ましの言葉を胸に衣川中学でいきなり二年生の担任として教壇に立ったその日から、私の描いていた教師像はアツという間に崩れ去った。

市教委のおっしやる通り、生徒は元気がすぎた。チャイムが鳴つても一向に教室に入らない。教師の話は全く聞かない。そんな勝手気ままな男子腕白グループにクラスはかき回されてしまった。その不正を正そうとする正義派の女生徒達を支援すべき教師としての力量がその時の私には無かつた。そしてやがて、真面目な生徒達の不信を買うことになつていった。担任一年生で何もわからない私に比べ、この学校では一年先輩になる生徒達の方がはる

かに成長していたのである。

そんな中、ある一人の男子生徒が突如学校に来なくなつてしまった。後から思えば、個人的に問題を抱えていたのであろうがおとなしくて目立たぬ彼は、私の気づかない所で腕白グループからいじめを受けていたのかも知れない。いずれにせよ毎日腕白供相手に四苦八苦の私は、正直言つて彼にまで目を配る余裕が全く無かつたのである。彼はやがて学校をさばり、近くの浜のイカナゴ加工所へアルバイトに行くようになつてしまった。

とにかく、担任として彼を何とか学校に呼び戻さなくてはならない。私は焦つた。複雑な家庭で、親の協力は得られない中、何とか彼に会つて説得するしかなか

った。私は毎日放課後日が暮れてから彼のいるイカナゴ加工所へ日参することになった。しかし、会う度に彼は私に顔を向けず、私の問いかけにも一切口を開こうとしなかった。それだけ私への不信感が募っていたのであろう。それでも私は担任としての思いを一方的に伝えるしか手がなかった。そして別れ際には決まって「明日は学校に来いよ」と、きまり文句を呪文の如く唱えて、独り虚しく夜道を帰って行くしかなかった。そんな日々が何日続いたであろうか。

そんなある日、その夜も担任の責務としての日課を果たすが如く、彼の所へ足を運んだ。そしていつもの様に、口を開こうとしない彼に、担任としての、否、私の

思いだけを一方的に告げて、重い足取りで通り慣れた夜道を独り虚しくひき返して行つた。その途中のことである。後ろから近づくバイクの音とライトに思わず道を空けた私の横にそのバイクは止まった。事態がよく飲み込めないままその場に立ちすくむ私に、「オイツ、先公、乗れや、送つたる。」、顔はよく見えなかつたが、聞き覚えのある彼の声に、驚くと同時にうれしさがこみ上げた。久し振りに聞いた彼の言葉に私は有頂天になり、「よっしゃ、大観橋まで頼むわ。」と言うなり彼のバイクにまたがった。バイクが走り出したと同時に、私は初めて現実を直視した。中学二年生の運転するバイクの後ろにその担任が乗っているという現実を。しかし、私は工

ラかった。そのまま何も言わずに祈る思いで彼と共に夜の校区を走り抜け無事大観橋近くまでたどり着き、明日の約束だけを交わして彼と別れた。時間にして何分程であつたらうか、その間私は教師であることを捨て、一個の人間として乗り続けたのである。

もしこの事がなければ彼との心はその後も通じることがなかつたであろう。「乗れや」「よつしや」この言葉のやり取りで彼と私の厚い壁は崩れ去つた。翌日彼は久し振りに学校に顔を見せたのであつた。

その後彼はいくつかの問題を抱えながらも元気に学校生活を送り、無事卒業したことを付け加えておこう。

退職して早や五年、今、この大観橋に

佇むと、あの日のことが鮮明に蘇る。今となつては時効の成立したこわい話である。

完



妄想女子

明花

明けきらぬ梅雨の谷間。少しばかりの
青空がふと、日々の生活の緊張を緩めて
くれる。

朝から三時間近く。母を見舞うとすつ
かり空腹で、美味しいお店を探す元氣も
なく、病院近くのファストフード店の取り
立てて美味しくもない、かと言って不味い
わけでもない中途半端な味のスパゲティ
で空腹を満たすことにした。

「おひとりさま」でご飯を食べることは、
なんの抵抗もなくなった。本を読んだり、
景色のいいところなら空を眺めながら、ぼ
んやりする。

それができないときは、マンウォッチのスイ
ツチが「オン」されるだけだ。

日曜日昼前の店内は、ランチをして
いる中年夫婦が多く、どうしてこう雰囲
気が似てくるのだろう。他人から見ると
夫婦連れだと分かるから不思議だ。

空きテーブルを1つ挟んで隣りの夫婦
は同じようなボリユームのある体型で、プ

リント柄は違うがアロハシャツを着て、二人同じ白いふちどりのスマートフォンを持ち、それぞれが画面を睨みながら、無言でアイスコーヒーを飲んでいる。

会話もなく、かと言って話をしなくても間が持てるというのか、気を使わなくてもいいというのか。いや待てよ。最近はいメールでしか会話できないという夫婦もいるというからなあ。スマホで会話中ということか。否、それは似合わなさ過ぎる。最近使いはじめたスマホに夢中な中年夫婦だ。実年齢は若いかもしれない。

しばらくして隣りの席に「とん」とアイスコーヒーが置かれた。手入れの行き届いたあごヒゲの独りの男性が座った。二十代後半という感じか。朱いTシャツから出たぴつちりした上腕筋や胸筋が体を鍛えていることを物語っている。ジーンズの丈もバランスよく、くるぶしが出ておしゃれ感が漂っている。若い子らしく足元はサンダル履きだ。

おもむろに、デイバッグから極薄のiパットが出てくる。赤いカバーが程よく使いこなされてご愛用の「相棒」なのが良くわ

かる。そして何かを検索しているのではなく、文字入力を始めた。タッチタイピングというわけではないようだが、軽やかなタッチで指が動く。仕事なのか、頭にいつぱい詰まった内容物が、ハイスピードで次々と文字情報に置き換えられていく。

理系の院生か研究者なのだろうか。

次に登場した茶色い革の手帖は、使い込まれていて剥げた感じが風合いを感じさせる。そしてコンピュータを操るのとは真逆な印象で、手帳にはキレイにインデックスが貼られ分類され、書き込みながら付

箋を貼り付けて情報を整理している様子だ。

使っているボールペンもデザインがよく、かなりこだわりを持って選んだ様子だ。

センスのよさはデザイナーか企画関係の仕事をしているのか？

何気ないフリをしてテーブルに忘れ物でもしてみようか。いつそ、逆ナンしてみるか。

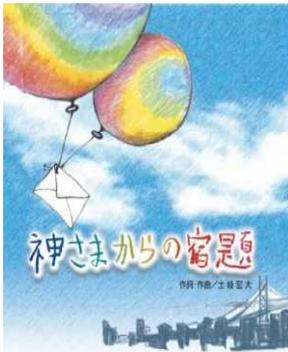
彼のスマホが鳴る。「はい、まいど」

あかーん。その関西弁。声は、も、ちよつと渋めで頼みたい。白日夢も覚める一瞬。

セミの鳴き声はまだしない日曜日の昼
下がり。

今年の夏はまだ始まってない。素敵な
恋でもしてみようか。





F O P

しんこうせいこつかせいせんい いけいせいしょう
進行性骨化性線維異形成症 (Fibrodysplasia Ossificans Progressiva : FOP)とは結合組織に発生する稀な遺伝子疾患。発症率は200万人に1人。筋肉などが骨に変わります。

◆明石でも市立明石商業高校1年生の山本育海君がFOPです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し。ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

◎「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。
ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせは『いっくんを応援する会 - FOP明石 - 』

事務局 office@fop-akashi.jp (メール)

◆<http://fop-akashi.jp/office/> (HP)

◆絵本やCDの販売も行われています。(点字版もあります。)
絵本は1冊500円(送料別 - 3冊まで送料: 飛脚メール便で80円)

メール ehon@fop-akashi.jp

D-FAX 020-4622-7570

◎申込方法: メールまたはFAXにて、お名前、郵便番号、住所、電子メール、電話番号、注文部数を明記の上、お申し込みください。

◎学校での教材セットもあります。お問い合わせ下さい。

詩 三編

大西隆史

23.4度傾いた世界より愛をこめて

世界がそれほど綺麗じゃないってことに気

付いたのは

一体何時のことだろうか

世界がそれほど優しくないってことに気

付いたのは

一体何時のことだろうか

真つ赤な空を見て

熟れた果実の陶然たる色ではなく

哀愁を想い始めたころだろうか

打ち寄せる波に

どこまでも広がる冒険譚ではなく

底知れぬ恐怖を覚え始めたころだろうか

一日を過ごすたびに

明日に向かって全力で疾走しているので

はなく

終わりから目を背けて走っていると気付

いたころだろうか

ねえキリストさま

ねえムハンマドさま

ねえおしやかさま

綺麗じゃなくて醜くて

優しくなくて厳しくて

そんな世界に生れ落ちて

救いなど要らない

しあわせです

めがね

眼が悪い

度のきつい眼鏡が手放せない

彼のいない世界はどこか

ぼうつと色が躍る世界で

彼のいる世界はそう

きりりとした世界で

私はどちらも大好きだ

眼が悪いのね

まあそれは可哀そうね

★
★

コンタクトにおしよ

レーシックなんててもありますよ

いえいえ、これもまた一興ですよ

今の世の中はちよつと煩すぎるから

時々眼鏡をはずすのです

見えないことは哀しくはなく

見えないことは楽しいことだ

こつちだこつち、いやこつちだと

騒々しいものたちから少し離れて

ぼんやりとした色の世界に浸れることは

哀しくはなくて楽しいのだ

まともじゃないけど

まともな人には決して見えないものがある

それを知らずに憐れむ彼等に

そつと微笑んで

ときどきあちらの世界へとダイブする

どうだい、いいだろう？

★★

悪い人

悪い人がいい

自分が悪くなりたくないから

相手を柔らかなナイフでぐりぐりと

善人じみた笑顔でかき回すよりも

自分が悪いのだからと

相手を鋭利なナイフですばつと

哀しげな顔で斬りたい

悪い人がいい

この世の綺麗などころだけを集めた楽園

の裏側で

汚いものが呻き声をあげながら埋め立て
られるなら

この世の綺麗などころだけを集めた楽園
に

汚いものをぶちまけて彩としてやろう

悪い人がいい

自分の正しさを声高に叫びながら

下卑た笑いのもとに正しさに塗りつぶさ
れるなら

どんな正義も悪もない

柔和な笑顔で後ろ指を指されていたい

悪い人がいい

うん

悪い人がいい



江戸の敵は長崎で討つ

高阪博一

窓を雨粒がゆつくりと流れた。雨が止みそうだ。この二日間は激しい降りだった。外に出ることがなく部屋にいて、雨を眺めているのにも厭きてしまった。階下の

ダイニングに行き、朝の珈琲を入れた。ふんわりとした苦味を含んだ香りが辺りに流れていく。一口含んで立ち上った。新聞を取ろうとして、玄関の方に私^{わたし}は歩いた。

外に出ると、雨は霧のような小さな粒に変わっていた。郵便受けを開けて、ビールに包まれた新聞を取り出した。「このサービスはいい。濡れた新聞はどうしようもないもんなあ。あれ、何か入ってるわ」と呟きながら、中を覗くと封書が一通入っていた。定形の大きい方の封筒だった。

「それにしても、よう降つたなあ。もう何時間かしたら、久しぶりの青空や」私は空を見上げた。手にその二つを持って家に入り、ダイニングの椅子に坐った。珈琲の幽かな香りがまだ残っていた。

「どうやって、ビニールに包むんやろう。機械なんやろうけど……」愚にもつかないことを口走り、その袋を破つて、私は新聞を取り出した。「ああ、そやそや。封書は？」と新聞から目を離して、それを手に取り裏を見ると、T中学校昭和三十七年度卒同窓会と印刷されていた。封を切つて、入っているものを取り出した。挨拶状の類いと写真一枚が入っていた。

挨拶状には出席の礼と写真を同封することが手短に記載され、「次は五年後の七十歳になった時です。それまで元氣

で！」と結んであった。写真はクラスのもので、出席者十数名が写っていた。ぼんやり眺めていると、二ヶ月ほど前に行われた同窓会のことだ。桜が散り始めていたというのに、まだ寒さの残っていた。あの日が頭を過ぎった。「行かない方が良かったかもなあ」ぬるくなってきた珈琲を口に含みながら、後悔の言葉を呟いていた。

「久しぶりやなあ。何年になる？卒業して何年間は会ってたけど、二十歳も過

ぎてしまうと、徐々に機会がなくなつたものなあ。年賀状程度になつたものなあ。それはそうと、今なにしてるん？」Mが笑顔で小走りに近づいてきて、私に声を掛けました。彼とは幼馴染だ。家が近く、小学校に入学する前から遊び仲間だつた。同じ小学校や中学校に通いながら、クラスが一緒になつたのは中学三年の一回きりだつた。

「ほんまやなあ。四十年以上や。僕は年金生活者や。お前は何か貫禄付いた感じやないか。肥えてるだけやないよな」

濃紺のダブルの背広を着たMに向つて、モスグリーンの薄いセーターを着た私は多少棘のある言葉を放つていた。私は六十歳で定年退職した。この夏には六十六歳になる。この五年、何もせず、ぶらぶら年金生活を送つていた。私が会社を辞めると、「四六時中、顔を合わするのは嫌やわ」と女房が言つて、パート勤めをするようになった。大した収入ではなかつたが、私の年金と多少の蓄えとで特に生活に困ることはなかつた。困ることと言えば、無趣味なことだけだつた。

「自由の身やないか、羨ましいわ。俺は貧乏閑なしや。小さな会社でもトップは辛いで。コレステロールも付く間がないわ。そうすると、やつぱり、貫禄と違うかなあ」

冗談めかしに言い返すMの口許は、どこか優越感の喜びを含んでいるようだった。Mは小学校時分から勉強が出来るタイプではなく、やんちゃな子供だった。中学卒業頃になると、親も進路を心配したのだろう。自分のしている小さな鉄工所を継がそうとした。だが、高校だけはということで、工業高校へ進学したのだ。私は

普通高校に進学したので、互いに別々の進路を歩むことになった。それでも、時折通学時に顔を合わせる事があつた。その時は手短かに近況報告をする程度で別れていたものだった。

「お前は大学に進学してんなあ。近所で評判の秀才やつたからなあ。俺なんか、工業卒業したら、親父が先ずは『他人の飯を食え』と言う。親父が話を付けてきた小さな町コウバに就職したもんなあ、それも家から通えんような所の……。まあ、それが良かったけどね」Mが私の顔を見

ながら、得意げな表情をちらつと覗かせた。

この時分から、会う機会がほとんどなくなってしまうた。Mが正月などの連休に帰った時に、運良く会えるという具合だった。Mに会えないからといって、特に淋しいとも私は思わなかった。大切なのは現在付き合っている範囲の人達だ。幼馴染は偶に会うだけでいいのだ。

「そやなあ。高校卒業して、更に進路が別れたもんなあ。何年かして、お前が親父さんの仕事を継いで、家に帰ってきた時

は、俺は就職して二年目。その年に東京へ転勤になったもんなあ」私はあの頃のことを思い出していた。大学を卒業して商社に就職した。全国的な企業だ。どこに異動するのか、皆目見当が付かなかった。異動が嫌なわけではなかったが、出来れば家の近くが希望だった。東京は本店だった。同期の何十人かは地方ばかりで、東京への異動は私一人だった。同期の皆は羨ましがっていた。

こんな立ち話をしていると、どんどん人が増えてきた。辺りは笑い声や挨拶の明

るい会話に包まれていった。

「あいつ、憶えてる？」

「憶えてるよ。よう先生に怒られてたなあ。ええつと、名前は……、出てこんなあ」「秀才の割りに、憶え悪いなあ。Yやんか」「そうや、Yや」

「ああ、こつちに向つてくるあの女、分かるか？」

Mが言う方向を見た。忘れる筈はない。

この頃、何故か「どうしているのか？」とやたら思い出していたあのひとだ。

「Sやろ」

「へえ。あの女は忘れてないんや」

Mが驚いたような顔を私に向けていた。

「Sは出席するやろか？」と案内状を受け取った時、真つ先に彼女の顔が浮かんだ。彼女以外に、どうしても会いたいと思う人はいなかった。返信を躊躇っていた。

彼女の出席を確認する術はない。返信の期限が近づいてきた。出席して欲しいという願望が、日増しに強くなってきた。不思議なものだ。願望が徐々に確信に変化していった、特に根拠があるわけではないのに。ただ、『信じるものは救われる』という

信仰にも似た感じを抱いていた。

「何年ぶりやろか。T君に会うの」

Sは笑いながら私の方を直視して、短い言葉を口にした。Sとは中学三年の時、初めて同じクラスになり、慕^{オモ}い始めたのだ。内巻の短い髪が小さな顔になびき、小柄ではあつても、ふくよかな身体の線が、ちよつと小さめの紺のセーラー服と相俟つて、十五の子供の妄想をかきたてた。そのSが微笑みながら、いま目の前に立っている。確信通りになった。だが、逢わねは良かったとも思つた。

卒業する時に、Sに初めて気持ち打ち明けた。Sは受容れてくれた。別々の高校に進学したが、付き合いは続いた。手を握りたいと思つても握る勇氣もない、まるでママゴトのような交際だった。互いに大学へは進学した。高校と同じように一緒に大学ではなかつた。或る時Sから電話があつた。

「私、好きな人ができた」と。

「ほんと、いい友達やつたよね」と。

「友達やなんか、思つたことなかつたわ！」
と私は大きな声を出して、電話を切つた

ことを忘れはしない。

もう、四十五年以上が過ぎていた。長い時間だ。Sはもうあの時のひとではなかった。あの豊かな髪は白髪に覆われ、小柄なふくよかさは、締りのない太った姿に変わっていた。顔の皺やシミの数が時間の無慈悲さを表していた。逢いたいと思っても、逢うべきではなかった。思い描いていたのはいつもあの別れた時の姿だった。想像の中では人は老けることがない。いや、老いを避けて意識の外に追いやっているだけなのだ。

「変われへんなあ。私はアカンわ。こんなに肥えてしまつて」何もなかったように、Sはまた言葉を繋いだ。「そんなことないよ。変われへんよ」私は失望を隠すように、短い答えをしていた。老いはSだけのものではない。私も変化しているのは当然のことだ。頭は薄く、額は広く、皺は多くなつた。きつと、Sも同じような感慨を抱いているに違いない。

「年寄つて、口うまくなつたね」

「そんなことないよ」

「いや、うまくなつた」

「そうかなあ。久しぶりやから、そう思うのと違うかなあ」

私はMが傍にいることも忘れて、Sと挨拶話をしていた。

「ごめん、俺、ええやろうか？二人の邪魔やないかなあ」

「ごめん、ごめん。M君も変われへんなあ。

ほんとに、久しぶりやね」

SがMに向つて挨拶を交わした。

「ほな、席に着こうか。三年のクラス毎に席があるそうやで。あつ、あそこや」

Mは会場のテーブルを眺めて、声を上

げた。「よう知ってるなあ。何組やったか、私忘れてたのに」Sは私の方を向きながら、落ち着いた声を出すのだった。私もクラスが何組だったか思い出せない。八組だったのか、九組だったのかと思つてみると、Mが私達の方を見ていうのだった。

「八組やんか」

賑やかにざわめく人の輪をぬつて、目指すテーブルまで歩いて行つた。久しぶりの明るい照明が私には眩しかった。

懐かしさはいろいろな思いを溶かしてくれようだった。思い出話に棘はあつても、

悪意はない。飲んで食べて話していると、時間はあつという間に過ぎてしまう。司会者が「話は尽きませんが、そろそろ中締めとします。二次会はご自由に」と言った時、私の腕時計は七時を指していた。「もう、こんな時間なんや」と呟いて、周りを見回した。Mはあちこちのテーブルを回っていた感じで、相当飲んでいる様子だった。ふらつく足元で、私とSのいる元のテーブルに戻ってきた。

「どうする？二次会は。行くやろう。場所は俺に任してくれるか」

Mがテーブルに坐っていた私とYやS他を含む五人を見て言うのだった。二人、用事があるからと言って、行かぬことになった。「そしたら、俺をいれて四人か。ちよつと待つてな。電話入れとくわ」

携帯電話を取り出し予約の連絡を入ると「ほな、行こう。タクシーで、十分程の所や」と我々の方を向いて、Mは愉快そうに大きな声を出した。

私はタクシーに乗るのも久しぶりだった。時折、見覚えのある場所を通り過ぎて行く。五十歳で隣の県にある子会社に

出向し、畑違いの加工関係の仕事をして
いる内に、六十歳以上は働かないと決め
てしまった。それなりに食べていけるなら、
もうこれ以上、気を遣うのはまっぴら御
免と思つたのだ。当初は単身赴任であつた
が、温暖でのんびりした今の住いの環境が
気に入つて、定年二年前に女房を呼び寄
せた。一人息子はもう独立しており、女
房との生活だけを気にすれば良かった。
「もう、五年が経つたんや」

私が小さく呟くと、Sが「何か言つ
た？」と窮屈に密着した身体を横に向

け、声をかけてきた。「別にになにも」と私は
応じていた。

Mが言つたように、十分程度で店に着
いた。運転手の横に坐つていたMは途中で
居眠りをしていたようだ。「着いたか。タク
シー代、俺が払うわ」Mが運転手に五千
円を握らせた。「ツリはええで」とMは大
きな声を出した。店は繁華街から多少外
れているが、人通りはそれなりにある場所
にあつて、カウンターと上がり座敷のある
小綺麗な感じだった。我々は座敷に案内
された。Mが小声で主人に何か言っている

ようだった。主人の「よく分かりました」という声が入ってきた。

酒やビールと共に、豪華な船盛りの料理が運ばれてきた。「こら、高いやろうなあ。お金、何ぼ持つて来たかなあ」私は頭の中で声を出していた。妻が働いているとはいえ、たかがパートだ。私は年金生活者の身だ。小遣いは知れたものだ。同窓会の会費や電車賃はバカにならない。それに二次会の費用だ。割勘でも人数の多い方が負担は少ないかもしれない。帰った二人をもつと誘うべきだった。そんな思いがふ

と頭を掠めた。

Mは愉快そうにどんどん飲んでいった。私はそれ程飲めない。付き合い程度には飲むけれど、それも昔のことだ。仕事を辞めたら、そんな付き合いの場面もなくなっていた。それに、酒は好きではない。注いでくれるビールは嘗める程度で、酔うまで飲むことはなかった。正面にいるMの目が据わってきた。言葉も荒い感じになってきた。私はちよつと嫌な感じがし出した。「俺の名刺や」

Mが私に名刺を差し出した。営業用のもので、会社名と役職等が書かれてあつた。

「ふーん。社長さんなんや」

「お前、名刺、持つてないんか。そや、年金生活者や言うてたな。肩書きのない奴は名刺いらんな」

「肩書きなかつたら、あかんのか。人間、肩書きやないやろう。中味やろ」

酔っている人間を相手に正気の者が言い合いをしても、仕方がないことはよく分かつている。それでも、私の語気が強くなつ

た。「社長さんや。素晴らしい出世やないか」一緒に付いてきたYが酔いの回つた口で、仲を取り持ちつつ言葉を挟んだ。

Mの飲むピッチがますます上がつてきた。「二十人程度の会社やけど、社長は社長や。このゴツゴツした手を見てくれ。頑張つたんや。今では給料が百万円や。それに、接待で会社の金も使えるんや」
「それが、どうやねん」と言いたかつたが、
無然として私は黙っていた。六十代も半ばまで生きてきたのだ。誰もが互いに頑張つて生きてきたのだ。「お前だけやない」

と心の中で言い放っていた。Sも呆れたような顔をして、黙ってお茶を飲んでいた。

「俺の両親はいつも、T、お前と俺を比較してた。『あの子みたいに、何で大人しく出来ないの』『あの子みたいに、何でかしくないの』『あの子みたいに、親の言うこと聞けへんの』うんざりする程、言われたわ。俺はいつもお前より劣ってた。俺はいつか、お前より上の人間になりたかった。上なら何でもええ、兎に角、お前に勝ちたかった。今日、お前が年金生活者や言うた時、やっと、勝ったと思ったんや」

私をじつと見据えて、Mは酔いの回った口で言うのだった。

こんな展開になるとは、まったく予想していなかった。Mがそんな思いを持っているとは知らなかった。往々にして優越している方は無頓着で気付かないものだ。あのまま帰れば良かったと私は思った。同窓会は長々いる所ではない。

「やっと、なったんや、Tより上に。今日はお祝いや。奢るで。飲んでや。食べてや」Mの言葉だけが、やけに大きく響いていた。

集合写真を手に取った。MもSもこやかな顔だ。彼ら以外の皆も同様だが、さて本当の顔はどうなのだろう。何かきつかけさえあれば、爆発するような暗いものを持つているように思った。冷たくなつた珈琲を口に含んだ。「五年後はバスやなあ。思い出は懐かしがっているだけでいい。会うと歪イビツになつてしまう」と私は小さく呟いた。

了



怪談図書館

大西亥一郎

諫早が加世子に言った。

「ね、加世ちゃん、95年版の公害防止大鑑、とつてきてくれる。請求記号は519.

5よ」

「はい」と返事したものの、あまり行きたくはない。

しかし、この道二十年の女性図書館員諫早に向かつて、地下書庫が怖いから、行きたくないとは言えない。

※

「もう、5年以上前になるけれど……」

この地下書庫で、臨時採用された飛田薫という若い女性が亡くなったのだという。それも3日間発見されなかった。

「あなたと同じ年頃ね」

諫早は、唇に笑いを含みながら、加世子の目を見ていった。

おどかさされているのだとは思っていても、怖い話だった。

それを聞いたばかりである。

※

「なに？」

加世子は、自分の心臓が跳ね上がる音を聞いた。

血がすつと下がる。

「だ、誰かいるの」

声は、真つ暗な空間に吸い込まれる。

慌てて、請求記号519.5を確認し、

本をつかむと、通路に出る。

地下書庫の通路の天井と、突き当たりに見える出入り口は灯りがついていて、だ
が左右の書架列は闇の中だ。

「ズリ……」

と人が足を引きずるような音がした。

「だ、だれっ！」

「ズリッ、ズリッ」

顔の両側が痺れたような気がする。

心臓が早鐘のように打ち始めた。

諫早の顔が、目の前をよぎった。

※

亡くなつた飛田薫は、日曜の朝出勤し、
昼から休暇をとつて、帰つたことになつてい
た。それが水曜の午後になつて地下書庫
で発見された。

どうやら、調べものに使うか、自分の読む本を借り出そうとして、地下書庫に降り、書架の下にかがんだらしい。そこに、上からハードカバーの重い本が落下したのである。書架の高さは２メートル２０あり、最上段の上の部分にも本が並べられている。踏み台を使ってもどうかすると手が届かない。その高さから２キロ近い本が、彼女の後頭部を直撃していた。運も悪かった。本の角が当たった。

大学を出て、図書館での勤務は半年近くになり、夢であった本採用の話も出始

めていたのだ。

※

加世子は叫びたいのをこらえて、入り口を目指す。

「ふふふ……」

人の声があった。

加世子は長いまつげの瞳を見開いて、

横の書架列をちらりと見た。

「き、きやー」

と叫びだそうとして、声が出ないのに気が付いた。

（あ、足が……）

動かなかった。いや、動かしているのだが、身体が前に進まなかった。

※

大和市立図書館には地下書庫がある。

30万冊もはいる大規模なもので、現在は半分ほどが埋まっている。完全空調設備があり、温度は20度に保たれ、湿度も一定だ。

真ん中の、2本の通路を挟んで広がる電動周密書架という本を収める棚は、ポタンで前後に動く。人などが触れれば止まる仕掛けである。

小中学校のプールが2つほども入る、幅が25メートル、長さが55メートル以上もある空間なので、蛍光灯は、センサーが人を感知した電動周密書架を中心とする書架3本分しか点灯しない。もちろん、通路と南北にある出入り口は照明されている。南の出入り口には、本を運ぶワゴンのようなトラックと呼ばれる台ごと載せられる小型のエレベーターがある。人が背をかがめれば、乗れなくはないが、禁止されている。

「いくの、やだわ」

というのが、42人の職員中、35人を占める女性職員の心境だ。男性はそう思っていないが言葉には出さない。

ただでさえ、薄気味悪い上に、飛田薫の事故死があつて、よけいに敬遠するようになった。

※

書架の本は、隙間があつても倒れないように書棚のレールに付いたブックエンドなどで挟みつける。しかし、徐々に本が開いたりして、時間が経つと崩れることがある。

誰もいないのに、そんな音がするとドキリとするものだ。

大和市立図書館の地下書庫の書架は2メートル20あるが、普通に立つて本を取り落としても打撲ぐらいで済むのだ。ところが飛田薫の場合は、下にしゃがみ込み、おまけに通常は倒れそうもない百科事典ほどの本が落下してきた。

さらに図書館は月曜日が休館日で、運悪く翌日の火曜日が月に一度の館内整理日に当たっていた。

館内整理日は開架の排列修正などが

忙しく、普段でも出入りはあまりない書庫へ、入ることはほとんどない。また飛田薫は、臨時の日給月給制だから、この日には出てこない事になっている。

彼女は日曜の昼から帰つたと、誰もが思っていた。また、自宅の方から水曜の朝に、欠勤の連絡が入ったときも、疑念を抱くものはいなかった。尤も、彼女の両親は月曜の午後に警察に届けていた。ただ、過去には友達の所に泊まることも度々あり、連絡の行き違いもあつたりしていたから図書館には伏せていただけである。

もちろんこの間に、地下書庫に入ったものはいるが、同じ場所に行かない限り、倒れている彼女に気が付かない。

照明は動体を検知して点灯するので、彼女が倒れてしばらくすると消えてしまう。

警備員も、一列ずつ踏み込んで点検などはしないから、運が悪かつたとしか言いようがない不幸な事故であつた。

水曜の午後、羽田という年輩の女性が、飛田薫の遺体を発見した。

「わ、わたし、隣の列で排列修正を一時間

ほどしてたわ」

その話を聞いて、岡田が真つ青になつた。

「そう言えば、背中がぞくぞくしたのよ」

「わたし、うめき声を聞いたわ」

書庫に降りたものは相当数いる。検視の結果はほぼ即死であつたと出ているのに、話は尾ひれを付けて広がつていった。

※

加世子は懸命に前に進もうとしたが、身体は一向に前進しない。

声も出ない。

心臓が飛び跳ねていて、手のひらに汗

がにじんでいるのがわかる。

（飛田薫さんつて、私と同年だったんだわ）

加世子は23歳、当時の飛田薫も同年齢のはずだった。

「か、よ……さ、ん」

声が出た。

加世子の心臓が縮み上がった。

息が苦しい。

「か、よ、さん……」

加世子は、ゆつくりと横を向いて書架

の間をのぞき込んだ。

彼女がいた。

会ったことも、見たこともなかったが、

確かに、飛田薫であった。

そこだけが青白く浮かび上がり、屈ん

だ彼女が見えた。

長い髪を後ろでくくっていたが、額には

血の筋が流れていた。

「ヒーツ」

加世子の口から悲鳴にならない音が

漏れた。

「こ、こ、これ……」

彼女はゆっくり立ち上がり、加世子に

近づいてくる。

「ズリッ、ズリッ」

加世子の目は、飛田薫の目に吸い寄せ

られたままだ。

「こ、これ……」

飛田薫の声は、加世子の頭を締め付け

る。

手に掴んだ本に何かが触れる気がし

た。

その目は、青白く濁っている。死人の瞳

に違いない。

加世子は息をすることさえ忘れていた。

ふつと冷たい空気が頬をなでた。

飛田薫の姿が消え、そこには闇が広がっているだけである。

加世子はごくりとつばを呑み込み、足を動かした。

「う、動く！」

どつと全身から汗が噴き出してくる。

ぶるぶると手足が震えているのがわかる。

必死で、出入り口にたどり着くと、加世子は階段を上がった。

※

「どうしたの、真つ青よ」

諫早が、冗談の葉が効きすぎたのを些か後悔しながら言った。

尤も、それでも少し、笑いが含まれている。

「い、いえ、な、何も」

加世子は言葉を吐き出した。

「あら、そう」

「こ、これ」

加世子は、持ってきた本を差し出した。諫早の手が止まった。

「な、なに……こ、これ……」

諫早が頼んだのは、95年版の公害防
止大鑑である。請求記号は519.5。

だが、目の前にあるのは933「怪談」
であった。

それには、赤い血の跡が付いていた。

了



◆ ショートショート

運転免許

高阪博一

我が家のガレージには自転車がない。台、駐車している。四輪あるので、取

駐輪とは言わない。駐車なのだ。

大阪で生まれ育ち生活していると、車ナシでも、それ程不便を感じることはない。地下鉄はあるし、電車・バス網も整備されている。中心部に行くには、車よりこ

れら交通機関が便利なが多い。渋滞

に巻き込まれることはないし、事故に巻き込まれることも少ない。私はそれで車の免許を取得しなかった。

昭和五十七年に仕事の関係で播磨の地に住むようになった。二十年程前だ。まだ若かった。いま、六十六歳になろうとしている。この歳になつて、最も嫌なのは雨降りに自転車に乗ることだ。違反と知りつ

つ、傘を差して乗るのだが、まるでサーカスのようだ。危ないことこの上ない。「今更、免許なあ」と思いつつ、鬱陶しい梅雨空を眺めて、てるてる坊主を吊るしたい心境に駆られる毎日である。



なにしてる

地獄シリーズ2

大西亥一郎

まいにちまいにち あそんでござる

職場の 康夫は 仕事が遅い

職場の 康夫は 文句が多い

職場の 康夫は 友達いない

だから できます 職場のいじめ

それも

隠れてやりまする

口でネチネチ嫌みを垂れて

仕事の連絡後回し

休憩時間は

知らん顔

時にはワザと

間違え教え

落ち込む顔見て

ニヤリと笑う

時には怒鳴って

ストレス解消

鏡に映る自分の顔が

てかてかざらざら脂ざり

身体の血液どす黒く

心は歪んで血が出ていても

その日がくるまで



まるで気づかぬ

地獄の毎日

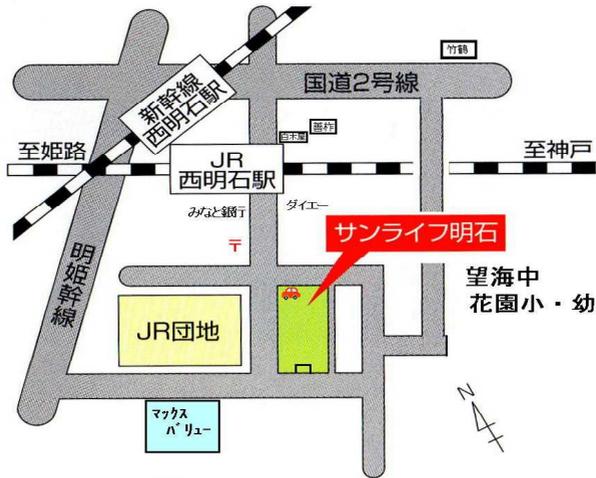
今日も康夫を ねちねちと

豪放そうに装いながら

明日も康夫を ねちねちと

その日がくるまで

続けます



◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、手帖などにお控え下さい。● 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号(第20号)の原稿締め切りは9月末必着です。

7月例会は20(土)です。ご予約下さい。

9月例会は21日(土)です。

◆HPに、19号までを、PDFファイルで掲載しました。

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>
(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきます。)

◆今月号の表紙は、編集子の作品です。パソコンの花子フォトレタツチンソフトで作ったものです。クラブは幽霊が「ばあ」ですの、Baあです。この街の看板は「お化けや幽霊や怪物、魂」と書いてありますので、どうもあの世のビル街のようです。

相当以前に作ったのですが、皆さんも作品がありましたらどうぞ。

◆胃弱亭骨人さんのエッセーを打ち込みながらニヤリとしてしまいました。荒れる八十年代前後の中学校です。

書かれているようにいまでこそ時効ですが、色々あったものです。

私も会社員時代も教員時代

も市役所の職員時代も、それからも「おや、文章のネタがずいぶんあるじゃないか」と改めて気がつきました。子どもの頃からのことでも膨大です。学生や主婦の方でも見回せば沢山の題材があります。

但し、綺麗事にしてしまいませんと、薄っぺらになり人の心に入りません。

といって、拙い出来事や失敗、自分の醜い心を総てさらけ出すには勇氣と、そして「さじ加減」が必要です。

どう料理するかこそ、ものを書く人に問われることなのでしよう。

続いて小野村新さんの随筆が来ましたが、これもどうやら中学時代の日記を元にした物

のようです。女子生徒の扱いなど、読んでいて吹き出しました。因みに私は女子生徒に対して若い間あたらずさわらずになりました。専ら男子生徒と遊んでいました。不思議なことに男子と仲がいいと女子は付いてくるのです。

ご自分の性格にも触れられています。中学については、はからずも胃弱亭骨人さんと競演になりました。

同じ中学校？ かもしれないせん。

◆高阪さんの作品は、ハハアご自分のことが半分かと考えながら拝見しました。

これはご自分の中学時代からのお話。刻が流れて、「いやい

や」こんな事ありますねえ。
(亥)

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
〒673 - 0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場 年会費は3200円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、海外からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加いただかなくても、HP・掲示板などで状況を知ること可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>

アクトス 第19号

平成二十五年八月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）800円